

## 部会資料－ 1

### これまでの教育・人づくり部会における主な意見等について

- ・・・第 1 回部会意見 ◇・・・第 2 回部会意見
- ・・・他部会の委員・専門部会に属さない委員からの意見

#### 目指す姿 1 秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成

- 子ども達の学ぶ意欲を高めるためには目標があった方がよい。キャリア教育を進めていく中で、将来自分がどういうことをやりたいのかといった意識が形成されていく。こうした事業がしっかりと実施されることが学力向上にもつながるのではないかと。(廣田委員)
- 労働人口が減少する中、特別支援学校生の就労に対する期待は大きいと思われるが、そのためには特別な支援が必要であり、そこに予算を付けて事業を行うことは大変良いことである。(廣田委員)
- 学んだ事が地域においていかに役立つかを体感できるように、デジタル探究コースを設置している高校において、地域課題型実践学習を試験的に導入してはどうか。(豊田部会長)
- デジタル探究コース設置校で実施された取組の情報発信が足りないのではないかと。(廣田委員)
- デジタル教育がいかに地域に役立つかを可視化するため、高校生デジタル地域貢献コンテストのようなイベントを企画し、年 1 回開催してはどうか。(豊田部会長)
- (高校生デジタル地域貢献コンテストについて) イベント開催に当たっては、英語部門を設け、YouTube 等で積極的に発信していくことが大事である。(佐藤委員)
- 高校生に対する起業家教育を実施すべきではないかと。(佐藤委員)
- キャリア教育に男女共同参画(女性活躍)の視点を絡めていくべきではないかと。(佐藤委員)
- ひきこもり等で、能力はあるが集団生活になじめない方に対し、メタバースによる学びや活動の場を保障することにより、そうした方々の才能を活かす就労支援を行うことも可能ではないかと。(佐藤委員)
- 高校におけるキャリア教育を通して、自分のライフプランを立てるとともに、自分はどういった仕事をしたいのか、どういった仕事に合っているのか、ということの日々考え、自分と向き合う時間を設けることが大事である。(未来創造・地域社会部会：石田委員)
- 町民のライフヒストリーを高校生にインタビューさせるプログラムを実施した。様々な経験をしながら地元で活躍している大人がいることを知ることは、県内定着に効果的な取組であるので、中学・高校に導入していただきたい。(未来創造・地域社会部会：石田委員)
- 県外から若者等が県内に回帰するような意識を醸成するため、小中高を通じた地域愛着(郷土愛醸成)教育を実施してはどうか(企画部会(産業・雇用部会))

- ◇ 時代が変化し、デジタル化やインクルーシブ教育など、新たな対応が求められている。こうしたことへの対応を、適切に、かつ、先取りする形でしっかりと進めていただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 秋田県は、デジタル社会やグローバル社会といった将来を見据え、県立大や国際教養大を作った。私たちには、先人の立てた見通しをきちんと踏まえて、秋田の教育を伸ばしていく義務がある。(豊田部会長)
- ◇ 経産省のSTEAMライブラリーやPLIJなど、インターネット上の優良なコンテンツをどう活用するかについて、総合教育センター等で研究し、県内の先生方に広めてはどうか。(廣田委員)
- ◇ 秋田でしかできない学びや、秋田で挑戦していくことを考えられるように、地域力を発揮していくキャリア教育が必要ではないか。(佐藤委員)
- ◇ ローカルからグローバルの発信、女性活躍など、一昔前に比べて、若い人ができることが広がっており、その可能性の実現に向けた、教育を通じたエンパワーメントを行う必要がある。そのためにICTやDXが非常に大きな力を発揮すると考えている。(豊田部会長)

## 目指す姿2 確かな学力の育成

- 高校数学について、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド方式により、全県又はブロック単位で、習熟度別授業を行ってはどうか。(豊田部会長)
- 高校生が競争心を持って楽しく数学を学べるよう、オンラインを活用した数学コンテストのようなイベントを企画してはどうか。(豊田部会長)
- 教師の性として、50分間教えないと教えた感がないという気持ちがあると思われるが、それは子ども達にとって必ずしもよいことではない。(佐藤委員)
- 子どもは、自ら問題に向き合うことで、初めて教師に支援して欲しいものが見つかる。秋田の探究型授業は高い評価を受けているが、まだまだ教師の指導で終わっている部分がある。教師が支援の側に回るよう、授業改善を図る必要がある。(佐藤委員)
- VUCA時代となり、この先どうなるか分からないとすれば、色々なところに今のうちから投資をしておく必要があるのではないか。(廣田委員)
- オンラインで様々なことが可能となり、教育の在り方が変わる中で、学校の統廃合を行う必要があるのか。必ずしも対面で行う必要のない授業のために、長時間通学をさせる必要があるのか。(豊田部会長)
- 数学の授業においては、他者との交流から問題の解き方や数の見方を知ることが重要であり、対面授業も必要であると思う。(佐藤委員)
- 対面での教師の指導や同じ教室にいる他の生徒との対面での交流も大事であるが、1人1台端末を活用して他の生徒の解き方や考えを瞬時に共有するなど、オンライン化することで実現する新たな形の刺激もある。(豊田部会長)
- 授業におけるICT活用について、まだまだ教師が使うということで終わっている。子ども達がどう使うのかという視点での議論が必要である。(佐藤委員)
- 全国学力・学習状況調査や県の学習状況調査を踏まえ、どういった授業をしていくのか、授業のどこを変えなければならないのか、議論する必要がある。(佐藤委員)
- デバイスはアウトプットの共有に対しては有用であるが、インプットする道具とし

て使う場合、2台必要である。デバイスを2台持たせるという政策をとらない限り、電子教科書の活用については抑制的であるべきである。(豊田部会長)

- 科目の特性に応じたデバイスの効果的な活用方法を検討する必要がある。(豊田部会長)
- 「デジタル人材」について、人によって捉え方が異なる。どのような能力を持つ人材なのか、きちんとすりあわせた上で、各学校段階で必要とされる資質・能力を育成する必要がある。(廣田委員)
- 外部人材が授業のサポートを行う場合に、学校のネットワークに接続できるよう、指針を定めていただきたい。(廣田委員)
- 学生・生徒が楽しい授業を行うためには、先生自身が楽しいと思える授業でなければならない。先生方が本来業務に専念できるよう、教員業務支援員配置の充実を図る必要がある。(廣田委員)
- モデル校を指定し、教師が教科指導のみに専念できるような実証実験を行い、秋田から働き方改革の好事例を発信してはどうか。(佐藤委員)
- これからは、全ての子ども達にデジタルに関するスキルを身に付けてもらう必要があるが、将来的にICTをビジネスにするような高度なデジタル人材の育成とは別の話である。(豊田部会長)
- オルタナティブ教育は、これまで公立高校で行うことは不可能と思われていたが、広島県(イェナプラン教育校)や山形県天童市(マイプラン学習)では新しい試みが行われており、今後、主流になるかもしれない。今すぐ取り入れなくとも、視察を行う必要があるのではないか。(廣田委員)
- チャットGPT対応の教育の在り方について、全国に先駆けて指針を示すよう、検討していただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 紙ベースの教科書とデジタル教科書では、表現力の違いが見られるので、教科書の採択に当たっては、デジタル教科書も資料として検討した方がよい。(佐藤委員)
- ◇ 探究型授業の充実には、学年ごとの輪切り集団で学習するだけでなく、異学年で1つのテーマを取り組んでいくことも取り入れてほしい。祭りや行事をアーカイブ化する場合、一年間の学習でまとまるものではなく、継続的に取り組んでいく必要がある。(佐藤委員)
- ◇ 数学の「課題学習」があまり実践されていない。多くの教師は、教科書を使って指導していると思われるが、示されている題材は必ずしも生徒の問題意識と合致するものでないため、生徒は、自ら探究するというよりは、課題や解決方法を知って取り組む、習得的な学びとなってしまうのではないか。(佐藤委員)
- ◇ 課題学習でも解決したい問題を見いだすことが重要であるが、教師側の基準に合わせるのではなく、生徒の状況に合わせた指導・支援が必要である。これは長期的な取組にもなるので、カリキュラム・マネジメントの視点で取り組むことが必要である。(佐藤委員)
- ◇ 数学オリンピックで上位に入ろうと思ったら、解き方を覚えるだけではなく、自分なりの新たな解き方を考えていく能力が必要になる。(豊田部会長)
- ◇ これまでは教科書を一生懸命勉強するという学びが中心であったが、これからは探究学習が中心になっていく。先生方が新しい学びの指導に移行できるよう研修機会の充実を図る必要がある。(廣田委員)

- ◇ 日本でも、欧米と同様に、理系的思考を育てる数学の授業が必要になってきており、教育の仕方を変えていかなければならない。(豊田部会長)
- ◇ 数学オリンピックなど、楽しいイベントがあって、トップ層もそうでない層もみんな楽しくできるような教育を実現していければよい。(豊田部会長)
- ◇ 小・中学校では、様々な学習にプログラミングを取り入れているが、高校になると、教科「情報」の担当教員の仕事のようになってしまうのではないかと、若干危惧している。(廣田委員)
- ◇ 楽しく学ぶことこそ探究的な学習であると思う。探究的な学習は、知りたい事が先にあるって、それを調べていく中で、各教科で学んだ事を使ったり、更に深い教科学習をしたりして、達成感が得られる。こうしたサイクルを回していくことが新しい学びであるとする。(廣田委員)
- ◇ 大学では、探究を中心に授業を組み立てている。これからの高校生は、大学生が学んでいることをやるようになり、中学生は、高校生が学んでいることをやるようになる。社会が変わる中で、教育の在り方も変わるので、時代を先取りした教育を進めていただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 成功の肯定的感情として一番重要視されているのは、「楽しい」という感情である。社会や時代の要求に応えるという面が強くなると、「楽しい」という気持ちも消え失せてしまう。「楽しい」という学びになっているかという視点で、それぞれの教育を考えていくことが大切である。(佐藤委員)

### 目指す姿3 グローバル社会で活躍できる人材の育成

- 県内の児童生徒が、オンラインで県外や国内外の児童生徒と触れ合うことは、より広い視野をもって秋田の価値を再発見することで、秋田で学ぶ価値を知り、グローバルなマーケットの中で秋田をどう発展させていくかを考えるきっかけになるので、取組を更に広げていただきたい。(豊田部会長)
- グローバル社会で活躍できる人材を育成するとしたときに、英語教育だけでよいのか。AIによる文字起こしや翻訳技術が発展しており、これらをうまく活用する方法も考えるべきではないか。(廣田委員)
- 翻訳技術が急速に発展しており、10年後、20年後に英語力が本当に必要なのかは分からないが、さしあたり10年程度は英語力が必要な時代が続くと思われるので、英語教育には力を入れていく必要がある。(豊田部会長)
- 英語には、ツールとしての英語と、グローバルな視点を開くための英語という観点がある。スピーチコンテストなどで、秋田について英語で語ることを実践する場を設けてほしい。(豊田部会長)
- ◇ グローバルに発信できる力とは、SDGsなどグローバルな問題について語ることでなくて、ローカルなことについてグローバルに語れるようになることである。自分のことについて人に話すことができる発信力こそが、今の時代に求められているコミュニケーション能力である。人のことについて話す力より、ローカルのことについてグローバルに発信できる力を身につけて欲しい。(豊田部会長)
- ◇ 国際交流について、社会に出るまで、場合によっては社会に出てからも、全く経験しないまま生活していく可能性もある。今はオンラインも活用できるので、学校単位

ではなく、自由参加の形でも参加できる方法を検討いただきたい。(佐藤委員)

- ◇ 今の時代に、高校時代に国際交流の経験をゼロのまま社会に出て大丈夫なのかと心配になる。本当にちょっとしたことでよいので、全ての高校生が高校時代にオンラインで世界とつながることを実感できる経験の場を、一つでも二つでも与えてあげていただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 国際交流を難しく考える必要はない。何も英語で行う必要はなく、海外の日本人学校の子どもたちとインターネットでつなげてみようとか、海外にいる日本人向け、あるいは海外で日本語を学ぶ人向けの、インターネット秋田弁講座といった感じで、できるだけハードルを下げて取り組んでみてはどうか。(豊田部会長)
- ◇ キャリアには様々な可能性があることを理解してもらえよう、海外で活躍している秋田県出身者や秋田にゆかりのある人とオンラインで触れ合う「秋田わくわく海外キャリア講座」を実施してはどうか。(豊田部会長)
- ◇ ハードルの低い国際交流のやり方について、いくつか事例を考えて、教員研修等で紹介していただくと、県内でも広がっていくと思う。(廣田委員)
- ◇ オンラインで国際交流を行うとなると、旅費は掛からない一方で、事前の打合せ等、手間が非常に掛かるので、しっかりと予算を確保していただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 海外の人と学校の先生を結ぶところに、国際教養大学の学生をアルバイトで活用してはどうか。(廣田委員)
- ◇ 大学生をインターンシップで活用してもよい。国際的なセクションでプロジェクトに関わった経験は、就職活動時のよいアピール材料になる。(豊田部会長)
- ◇ 英語の堪能な大学生に、英語力向上の事例モデルを作ってもらい、高校生に紹介することも考えられる。(佐藤委員)
- ◇ 国際教養大学では、English Village という中高生に英語を教えるプログラムを行っている。学生も熱心に参加していて、プログラムとしても成功している。ぜひ活用いただきたい。(豊田部会長)

#### 目指す姿4 豊かな心と健やかな体の育成

- オリンピック選手を育成することと、学校で部活動をしながら人間的な成長を促すことは異なる。部活動指導員に対し、学校での部活動の在り方についてレクチャーする機会を設ける必要があるのではないか。(廣田委員)
- 学校教育の役割は教科教育であり、先生が部活動指導を行うことは世界的に見ても極めて特殊であることを認識し、部活動に人間形成を任せていた日本の教育のあり方を見直す必要があるのではないか。(豊田部会長)
- 体育祭など、みんなで体を動かし合って何かをすることは、若い人にとって重要である。コロナが収まった今こそ、体育の授業が重要になってくる。(豊田部会長)
- 運動部活動サポート事業において、高校野球強化支援が単独であることに違和感を覚える。様々なスポーツがある中で、本県の気候や土地を考えて、県民が誇れる他県にはないスポーツを増やしていくことも大事ではないか。(佐藤委員)
- それぞれの部活が頑張っている中で、野球だけ全校応援するのはやめるべきではないか。やるのであれば、公平であるべきである。(佐藤委員)
- 部活動の地域移行について、元プロ選手が地域の中にいるが、資格の問題があつて

指導できないという話を聞いたことがある。資格取得のサポートができれば、指導者の幅も広がり、子ども達の技術向上にもつながると思うので、取組を強化し、人材の掘り起こしをしていただきたい。(観光・交流部会：佐々木委員)

- ◇ 不登校について、あまり悪い事として捉える必要はないのではないか。これからの時代は、登校しない子どもがいるということに対応した学校運営にパラダイムシフトさせる必要がある。(豊田部会長)
- ◇ 学校に行きなさいと言われてやむを得ず行くのではなく、楽しいから行くといった状況にして欲しい。皆勤賞のような、我慢して学校に行くことが偉いという制度は、今すぐ廃止すべきである。(豊田部会長)
- ◇ 障害は一つの個性であり、個性的な子どもは今後増えていくとともに、そういった子どもも社会できちんと受けとめていこうという流れにある。そのためにはお金が掛かるので、十分な予算を確保すべきである。(豊田部会長)
- ◇ インクルーシブ教育は必ず取り組まなければならないが、現場の教員がそこに資源を振り向ける分、授業の質の向上に掛ける時間はなくなり、教育の質の低下につながる。お金も手間もきちんと手当して、本県教育の質の維持・向上に努めていただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 様々なところで「誰一人取り残されず」というフレーズを見かける。今は、学校に来られなくても、オンラインで授業を受けられる。新しい技術をうまく活用しながら、取り残されない人を作っていければと思う。
- ◇ 秋田県では、障害の有無に関わらず学習に参画できるようユニバーサルデザインの視点での教育が展開されているが、教師が学習者の思考の代行を行うと、分かったつもりでの授業になり、考えなくなってしまう恐れがある。児童生徒の実態を的確に捉えて適切な支援を行っていく、質の高い指導が重要であり、そのための研修の充実が必要である。(佐藤委員)

#### 目指す姿5 地域社会の活性化と産業振興に資する高等教育機関の機能の強化

- 社会人のリスキリングのために、大学等でオンラインによる講座を開設し、県内どこからでも受講できるような体制を整備するよう、県から県内大学等に働きかけてはどうか。(豊田部会長)
- 秋田大学では、従前から、リカレント・リスキリングの機会を提供しているが、受講者や雇用主に負担感があり、利用が進んでいない。ICTを活用して自由にキャリアアップできる仕組みを作るべきである。(佐藤委員)
- ◇ オンライン教育には、全国レベルでは、JM00Cやgaccoといったものがあるが、レベルが高く、県内の高等教育機関が教材を提供することはハードルが高い。秋田版MOOCのようなものを作り、ローカルに情報提供を行った上で、良いものを全国に提供するといった仕組みを作れば、チャレンジしやすいと思う。(廣田委員)
- ◇ JM00Cについて、既存の授業をそのまま提供する形ではうまくいかない。専用の講座を作らなければならない、そのために教員の担当科目を減らすなど、色々な手当が必要であり、少しハードルが高い。(豊田部会長)
- ◇ JM00C等の様々な学びの場について、学校段階から周知する必要があるのではないか。(佐藤委員)

- ◇ 各大学では様々なリカレント講座を設けているが、高齢者を含め、世の中の人にもっと知ってもらうよう、努める必要がある。(豊田部会長)
- ◇ JMOOCなどは学位として認められていない。学びを職場の中でどう価値付けるかについて、理解を得られていない。(佐藤委員)
- ◇ 職場から受講してもらうにしても、何らかの業務負担軽減や経費負担が必要であるので、経費について県が助成するといったことも検討すべきでないか。(佐藤委員)
- ◇ 県立大学のドローン講座について、修了したら証書をもらえるだけでなく、ドローンを3年間無償貸与するなどの優遇措置が必要である。(豊田部会長)
- ◇ 県内高等教育機関において、リカレント教育で受けられるコンテンツの充実を図る必要がある。(廣田委員)
- ◇ 企業側にも、リカレント教育を受けることに対し、インセンティブを付けるような仕組みを検討すべきではないか。コンテンツを充実させても、受講者がいなければ意味がない。(廣田委員)
- ◇ 高大連携授業については「大学コンソーシアムあきた」のサイトで確認できるが、社会人がリカレント教育を受けたい場合に情報がまとまっているサイトがない。どこかで情報を集約して、県民に情報提供する仕組みを検討すべきである。(豊田部会長)
- ◇ リカレント教育について、高等教育機関だけではカバーできる範囲が狭い。民間企業で退職した方など、幅広く人材を集める仕組みがあると、取組に広がりが出てくるかもしれない。(廣田委員)
- ◇ 教育の側で、県内高等教育機関で行われているリカレント教育の情報を集約し、産業振興部門に情報提供する必要があるのではないか。(豊田部会長)
- ◇ 産業・雇用部会の立場では、企業にとって必要なスキル等の獲得、向上を図るという経営者側の視点になる。一方、教育委員会の立場では、学習者がどのような人生設計、どのようなキャリアを形成していきたいか、労働者側の視点になる。労働者側の視点に立つと、上司からの声かけを待って学びの場を得るかたちは、チャンスに恵まれない可能性もある。経営者側、労働者側のいずれの立場も必要なことなので、産業・雇用部会との擦り合わせが必要である。(佐藤委員)

## 目指す姿6 生涯にわたり学び続けられる環境の構築

- 文化芸術施設の入場料が廉価すぎると感じている。サグラダ・ファミリア等と日本の文化芸術施設を比較すると、価格差が5～10倍くらいある。入場料を上げ、展示物の価値やサービスの向上を行うことが必要である。秋田の文化芸術分野はもっと自信を持って発信し、しっかり稼ぐことが必要である。(観光・交流部会：丑田委員)
- ◇ 地域の文化財・文化資源について、英語で議論し、掲示板のQRコードを作成するなど、学校教育においてグローバルな発信力を身に付けるための材料として活かさないか。(豊田部会長)
- ◇ 放送大学で学んでいる高齢者は、年を重ねても、多様な思考を身に付けたい、知的な活動にも接したいというニーズがある。こうした要望に応えられる環境を整備していく必要がある。(佐藤委員)
- ◇ 高齢者の学びの場を充実させることは重要であるが、そのためのプラットフォーム

については、JM00C や gacco に参加する、大学の通信教育講座を発展させるなど、様々な選択肢がある。(豊田部会長)

- ◇ 県内の高齢者がリカレント教育講座に興味を持って参加してもらえるよう、チラシの作成や、関連する市民講座が開催された際に紹介するなど、周知の方法を工夫する必要がある。(豊田部会長)
- ◇ 高齢者がインターネットでリカレント教育講座に参加できるよう、公民館に高速通信環境・パソコン環境を整備すべきである。(豊田部会長)
- ◇ 高齢者が孤独化せず、公共の議論に参加できるバーチャルなスペースの確保に取り組む必要があるのではないか。(豊田部会長)
- ◇ 自分自身、幼少期に博物館の展示に触れたことにより、科学への興味関心が高まった。距離があってもインターネットで展示物に触れることのできる博物館のメタバー化は、良い取組であると思う。(廣田委員)
- ◇ 博物館の常設展示だけでなく、様々な所蔵物をアーカイブ化して見られるような仕組みがあるとよい。(廣田委員)
- ◇ インターネットが新たなステージに入り、距離が様々な経済活動、学習活動の障害にならない時代に入っている今こそ、秋田県は今までよりもはるかに早いスピードで発展していくはずであり、そのためには、時代に対応する美術館・博物館のDX化が必要である。(豊田部会長)
- ◇ 県立博物館では、様々なイベントを開催しているが、オンラインのものは少ない。できればオンラインのイベントも開催してほしい。(豊田部会長)
- ◇ 学校の統廃合により、地域の祭り・行事の継承が困難となってきている。ICTを活用してアーカイブ・記録として残すべきではないか。ただし、そのためには時間とお金が掛かるので、しっかりと予算を確保していただきたい。(佐藤委員)
- ◇ 国際教養大学で、平成23年に300以上の民俗芸能の動画を作成し、「秋田民俗芸能アーカイブス」としてインターネット上に公開している。日本語、英語、簡体字、繁体字で解説しているので、ぜひ活用いただきたい。(豊田部会長)
- ◇ インターネットの発展により、これまでできなかった様々なことができるようになっていたので、どんどん進めていただくとともに、これからのデジタル人材である高校生、特にデジタルを専門にする高校生に、PBLの一環として、地域の文化資源のDX化事業に参加していただきたい。(豊田部会長)
- ◇ 中高生がPBLとして祭りや行事のアーカイブを作成するとすれば、表現力や情報発信力の涵養に繋がるとともに、成果物は秋田県のためになる。そういった仕組みを考えていくのがよいのかもしれない。(廣田委員)
- ◇ 今の高校生・大学生は、インターネットを閲覧するだけのものと捉えている。もっとインターネットで発信する側になるよう、考え方を転換してほしい。(豊田部会長)
- ◇ 総合的な学習の時間について、ブラッシュアップされていないものが散見される。PBLの一環として、地域の文化資源のDX化に取り組むことは、地域の実情を踏まえ課題解決をするという総合的な学習になるので賛成したい。ただし、インターネットで広く発信するとなると内容や運用等の責任も伴うため、学校側の負担も考慮する必要がある。(佐藤委員)
- ◇ 国語力は、教育の基本となる力である。本との関わりを作るためには、幼児期に紙芝居を見たり絵本を読んだりした経験が重要であるが、幼稚園・保育所の先生は忙し

く、紙芝居や絵本を読み聞かせる余裕がない。幼稚園・保育所にお金が回るよう、配慮いただきたい。(豊田部会長)

- ◇ 健康な高齢者に、幼稚園・保育所にボランティアで来てもらって、読み聞かせに参加いただいてはどうか。(豊田部会長)